

宗像市議会
議長 岡本 陽子 様

建設産業常任委員会
委員長 小林 栄二

所管事務調査（行政視察）報告書

本委員会は、下記のとおり行政視察しましたので、報告します。

記

1 期 日

令和8年5月20日～5月21日（2日間）

2 視察地及び調査事項

（1）長崎県長崎市

ア「長崎さるく」の概要及び事業立ち上げ時の背景や経緯等について

イ「長崎さるく」における現地視察

3 今回の視察に至った経緯及び視察の目的

本委員会では、令和7年11月5日に実施した議会報告会における分科会のテーマを「観光」とし、市民や事業者などの参加者から様々な意見をいただいた。

これを受け、本市の観光の在り方について委員会としての考えをまとめるべく、議会報告会で出た意見をもとに、「本市の観光を盛り上げるための施策や仕組みの具体案」を出し合うなどの議論を重ねた。その結果、点在する観光資源を磨き上げ、その魅力を知ってもらうことで、周遊や滞在に結び付けられるのではないかと考えるに至った。

令和8年第1回定例会で委員長が本委員会を代表して一般質問を行うこととし、さらに議論を重ねる中で、長崎市で市民ガイドが観光客とともにまち歩きを行う「長崎さるく」の取組を知り、本委員会の考えを具体化するための参考になると考えた。「長崎さるく」を立ち上げた当事者から当時の経緯や課題等を聞き、実際に「長崎さるく」を体験することにより、委員会でまとめた考えを本市における具体的な施策に結びつけることを目的に、本行政視察を行うに至った。

4 調査内容

概要は以下のとおり。資料は議会事務局に保管。

◆長崎県長崎市（人口 38 万人、面積 405.69 k m² [R8.4.1 現在]）

【市の概要】

長崎市は、長崎県の南西部に位置する県庁所在地で、人口約39万人の中核市である。「明治日本の産業革命遺産」と「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の2つの世界遺産を有しており、江戸時代には国内唯一の江戸幕府公認の国際貿易港である出島をもつ港町であった。また、広島市と並び、世界で2つの被爆都市のひとつでもある。

令和7年度一般会計予算：2,275億6,000万円

【長崎さるくの概要】

「長崎さるく」は、長崎の方言で「ぶらぶら歩く」という意味の「さるく」をキーワードとした体験型まち歩きの観光である。知識豊富な市民ガイドの案内で、歴史、文化、人との触れ合いなど、歩くからこそ出会える長崎市の魅力を体験するまち歩きツアーが、定番コースから季節限定のコースまで多数

準備されている。

現在の「長崎さるく」は、2006年に国内初の「まち歩き」をテーマとした「長崎さるく博'06」から始まっている。博覧会の開催にあたり、長崎市では、長崎市に既にある地域資源を生かすこととし、博覧会の企画運営は「市民が主役」で進められた。「市民プロデューサー」を中心として「さるくガイド」や「さるくサポーター」など、多くの市民が博覧会に主体的に関わったことが、博覧会後も「長崎さるく」が継続していく原動力となった。

【調査事項】

- 1 「長崎さるく」の概要及び事業立ち上げ時の背景や経緯等について及び「長崎さるく」における現地視察（居留地界限）

（1）視察の概要

- ア 講演「長崎さるくが生まれるまで」 講師：田上 富久 氏
- イ 講演「長崎さるくの20年」 講師：桐野 耕一 氏
- ウ 現地視察（居留地界限のさるく体験） ガイド：桐野 耕一 氏

（2）講師（ガイド）の略歴

- ア 田上 富久 氏

長崎地域力研究会代表。前長崎市長であり、長崎市職員時代に「長崎さるく博'06」の企画運営を担当し、「まち歩き」という博覧会の新しい形を作り上げた。現在は、同会代表としてまちづくり活動に従事する傍ら、講演や執筆活動などこれまでの経験を発揮した活動を行っている。

- イ 桐野 耕一 氏

NPO法人長崎コンプラドール理事長。「長崎さるく博'06」に市民プロデューサーとして参画し、博覧会を成功に導いた。博覧会終了後もNPO法人長崎コンプラドールの理事長として長崎さるくに関わるとともに、長崎居留地まちづくり協議会会長などを務め、長崎居留地の歴史を生かしたまちづくり活動を推進している。

（3）視察内容

- ア 講演「長崎さるくが生まれるまで」の概要

長崎市は、九州でも有数の観光地であるが、かつてはグラバー園や長崎原爆資料館などの主要施設を見学すると長崎を観光したと考える風潮があり、観光事業は事業者のみが関わるものであった。このため、市民は、観光に対して参加も応援もしない状況となっていた。

観光の形態が団体から個人へと変わり、観光客が減少する中で、長崎市では、改めて「観光」の意味を考え、訪問客・事業者・市民の相互関係をバランスよく拡大させていく「観光まちづくり」を目指すこととなった。また、まちが持っている面白さが観光客にも市民にも十分伝わっていないと感じ、まち全体を会場にした「まち歩き」の取組を始めた。

2006年、日本で初めてのまちあるき博覧会である「長崎さるく博'06」の開催に当たっては、熱意のある市民が市民プロデューサーとして参画し「長崎さるく」の企画段階から関わるとともに、ガイドとして多くの市民が参加した。市民自身が改めてまちを知り、まちを好きになることで、まちづくりへのエネルギーが生まれた。また、市民プロデューサーやさるくガイドとして市民自身が主役になることで、市民に「やりたい」という気持ちが生まれ、市民による主体的な活動へと発展した。長崎さるく事業は、3分の1は観光だが、3分の2はまちづくりだと考えている。

まちづくりを行うに当たって大切なことは、「天の時」（時代に合った活かし方）、「地の利」（まちが持っているものやその個性）、そして、一番大事な「人の和」（力を合わせる）である。事業は、成果を求めがちであるが、そのための手法や考え方だけでなく、それらを支える市民の思いが事業の一番大事な「根」の部分である。

- イ 講演「長崎さるくの20年」の概要

「長崎さるく博'06」に市民プロデューサーとして関わり、ガイドを23年続けている。

若い頃、地域の若者として居留地まつりを存続したいとの思いで大浦青年会に所属した。まつりに参加し、市が企画したイベントであっても地域が自主的に動かないと盛り上がらないとの思いから大浦青年会がまつりの運営を担うようになり、企画部会長として事業に主体的に関わるようになった。

「長崎さるく」が始まって、市民がガイドとして参加するようになった。観光ガイドのプロが

小難しい話をするのではなく、一般の市民が、自分たちの暮らしや営み、小さい頃からの思い出やまちの未来像を参加者に語る風景が長崎のいたるところで生まれていき、ガイド活動を通じて地域のすばらしさと可能性に気づいた。

当初、市民はガイドといっても何をしたらいいかわからなかったが、繰り返しやっていくことで、行政からやらされるのではなく、自分たちがやりたいからやるという意識になり、「長崎さるく」は「市民が表現する場」になった。まちがステージになって、市民が活躍の場を得た。「長崎さるく」は、行政が表に出ず、市民を前面に出し、主役にしたことが成功の秘訣だと思う。

ガイドとして、地域の今を語り、未来を語ることを大切にしている。自分のまちを愛することが大事だと考え、今まで諦めずに続けてきた。今年、「長崎さるく」は20周年を迎えたが、これからもずっと続けていきたいと考えている。また、自分のまちを語ることができる子どもを育てたいと思っている。

ウ 現地視察（居留地界隈のさるく体験）

路面電車石橋電停～グラバースカイロード～南山手レストハウス～祈念坂～大浦天主堂前コースの説明に加え、地域住民しか話ることができない地域の歴史や桐野氏の幼少期の思い出なども交えた、まちへの愛情を感じるガイドであった。

【所 感】

・桐野氏から、地域が自主的に動かないとイベントは盛り上がらないという思い、市民ガイドが自分たちの暮らしや思い出、まちの未来像を参加者に語る風景が長崎のいたるところで生まれたこと、ガイド活動をすることで地域のすばらしさと可能性に気づいたことなどの話を聞いて、地域住民の力の大切さを感じた。

・長崎さるくの立ち上げ当時、実際に動いてくれそうな人を10人程度厳選して立上げメンバーになってもらい、一緒に先進事例の視察に行ったり、長崎市なら何ができるかを話し合ったりしたということであった。田上氏の「市民の力、根っこの部分が大事だ」という言葉、桐野氏の「行政からやらされるのではなく、自分たちがやりたいからやる」という言葉から、市民の熱量を引き出すことが大事だと感じた。また、田上氏の「市長を辞めても、まちづくりの仲間とはこれからも一緒に活動する」との言葉や、桐野氏の「さるく」に出会って一生ものの生きがいを得たような印象から、宗像市民の中にも、そのような生きがいとしての「さるく」が根付く価値は十分にあると感じた。

・田上氏の説明を聞いて、田上氏自身が、この事業を通して、改めて長崎市の良さを感じているのがよく分かった。また、桐野氏にガイドとして大浦地区を案内していただき、以前に何度も修学旅行の引率をしてきた自分と見る観点が違っていて、長崎の新たな魅力を知ることができた。

・田上氏から、行政職員、首長、ガイドという多方面での視点、そして、その根っことなる思いにより数十年活動されてきた経験を聞かせていただいた。現状の課題を理解して、まちの光に見える化するというのは本市においても必要なことであり、その光を市民が「自覚し、知ることによって好きになり、まちをもっとよくしたいと思う」という観光によるまちづくりを行っていききたい。

・30年前の長崎市は「昭和に埋もれている」というイメージだったが、20年前に「長崎さるく」が始まり、現在は、駅前再整備などのハード面が大きく変化している。苗だった木が根を張って成長するように、時間をかけてまちはつくられていくものだと感じた。本市においても、その一歩を踏み出していききたい。

・桐野氏の講演とガイドでは、長崎愛をたくさんのエピソードと共に語っていただき、宗像愛について考えていたところだったので、とても参考になった。宗像愛とは、自然に対する畏敬の念のように、当たり前にそこにあるものに感謝して大事に感じる心だと考える。これは世界遺産の精神と同じ価値観であり、宗像愛を形にすることは世界遺産を観光の視点で表現することだと感じた。

・長崎が海外から人や文化を受け入れてきた歴史を持つのにに対し、宗像もまた大陸との交流があったという点で、両者には「海外との交流」という共通の歴史的背景があると感じる。長崎市には外国人居留地、大浦天主堂などの「目に見える」歴史的建造物や、そこでの様々な物語が豊富にある。対して本市は、宗像大社という建造物もあるが、そこに根付いた信仰や精神性といった「目に見えない」感覚が根底にある。その目に見えない魅力をどのように表現していき、自分たちの誇りや思いを伝えるのか問われると考える。観光は、事業者だけでなく、多くの市民が当事者として関わることがポイントとなる。また、一過性のイベントだけではなく、日常をより大切にすることが観光客と市民の双方がまちの価値を感じることに繋がると考える。

・長崎さるくは、元々はイベントとして始まったものの、田上氏の一過性のイベントにさせないという思いがあった。本市でも一過性のイベントにとどまらない観光へのアプローチを模索する必要がある。また、桐野耕一氏のガイドは、郷土の誇りと知識に富んだ説明であるものの、特段専門的な内容ではなく、地域の人材だからこそ出てくる言葉に楽しさを感じた。地域人材の活用として、本市でも導入が可能な試みであると感じた。

2 「長崎さるく」における現地視察（外海（そとめ）地区）

（1）視察の概要

現地視察（外海地区のさるく体験） ガイド：松川 隆治 氏

（2）現地視察ガイド（松川隆治氏）の略歴

長崎外海キリシタン研究会代表。隠れキリシタンの末裔であり、外海地区で市民ガイドを行うとともに、外海観光ガイド協会会長、外海潜伏キリシタン文化資料館館長などを務め、外海地区の歴史を伝え続けている

（3）視察地（長崎市外海地区）の概要

外海地区は、江戸時代の禁教政策下においてキリスト教徒が密かに信仰を継承してきた地域であり、潜伏キリシタン文化が色濃く残る地区である。また、世界遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を構成する出津（しつ）集落や大野集落があること、市の中心部から離れていること、観光資源が点在していることなど、本市と共通する部分を有している。

なお、今回の視察で訪れた施設の概要は次のとおり。

- ・外海歴史民俗資料館：外海地区の民俗資料、潜伏キリシタンに関する宗教資料などが展示されている。
- ・ド・ロ神父記念館：1800年代後半に外海地区の主任司祭として社会福祉、土木、産業などに奉仕したフランス人宣教師ド・ロ神父の業績を伝える記念館であり、神父がこの地で行った様々な事業に関する品物が展示されている。
- ・出津教会堂：ド・ロ神父が1882年に私財を投じて建てた質実剛健な教会であり、現在も信仰の場として使用されている。
- ・旧出津救助院：ド・ロ神父が女性の自立支援のための作業場として1883年に設立した施設であり、授産場などを見ることができる。

（4）視察内容

外海歴史民俗資料館～ド・ロ神父記念館～出津教会堂～旧出津救助院

コースの内容は、潜伏キリシタンやキリスト教の歴史を案内するものであった。本視察のガイドの松川隆治氏は、隠れキリシタンの末裔であり、当事者だからこそその貴重な話を聞くことができた。隠れキリシタンと潜伏キリシタンの違いを改めて学ぶとともに、それぞれの立場の人たちの思いを感じることができる内容であった。

また、旧出津救助院では修道女による説明とオルガンの演奏があり、苦しい生活の中で精いっぱい生きた当時の人たちの生きざまや、今もその歴史を守っている人々の思いを感じることができた。

【所 感】

・隠れキリシタンの末裔であり元高校教師だった松川氏から、隠れキリシタンや潜伏キリシタンについて詳しく説明していただき、その時代のキリシタンに対する厳しさを感じることができた。

・外海地区におけるキリシタンの歴史に触れ、人が生き延びるのに、いかに過酷な環境であったかや、隠れキリシタン・潜伏キリシタンの強い信仰心が非常に豊かに伝わってきた。外海でその時代を生きてきた先人たち、その思いを受け継ぐ今の外海の住民の姿がありありと想像できた。本市で「さるく」に取り組む場合も、「人の顔や生き方が伝わる」というのは、大事なポイントになると思う。

・長崎市の中心部から1時間ほど離れた外海地区は、隠れキリシタンの里であり、ほとんど平野部がない山肌の集落であった。歴史民俗資料館を見たとき、自分が幼い時に使っていたものと同様の品々があり、思わず懐かしさが込み上げてきた。本市にも、以前、岬地区にあった民族資料館内の資料があることを改めて認識した。また、松川氏のガイドからは、優しい口調の中にも、当時の隠れキリシタンの迫害の様子が伝わってきた。そういう状況下でも信仰を守ってきた人々の思いや、ド・ロ神父の博愛の

精神に満ちた外海地区の人々への思いの大きさに驚かされた。

- ・外海地区というキリシタンが潜伏した陸の孤島において、宣教師と住民によるストーリーがあり、施設や道具が残り、それを隠れキリシタンの末裔がガイドとして説明しているというのは、ドラマチックではあるが、「信仰心を伝える」というのは難しいと感じた。本市においては、「当たり前」に宗像の住民が大事に思っているものをコミュニケーションを通じて感じてもらうような形が第一歩だと考えた。

- ・現在も信仰の拠点である出津教会や伝導師バスチャンの物語等、歴史遺産とストーリー性が感じられる地区である。単なる観光地ではなく、現在も生活の中に信仰が根付いていることが感じられる。宗像の持つ精神性や信仰は、この地区のキリシタン信仰に通じるものがある。日常の中で守り続けてきた信仰の歴史や思いがさりげなく語られることで、訪れる人々の心を強く動かしている。本市にも宗像大宮司家にまつわる物語、脈々と受け継がれてきた精神性や思いを伝えることで深い共感を生むことができると思う。長崎さるくと同様に、まずは市民自身が「自分のまちにはこんないい所がある」と良さに気づき、地元への愛着を持つきっかけをつくることが重要である。

- ・松川氏から地域と先祖の誇りと苦悩をありのままに伝えていただいた。その地域に生きる住人の言葉は現地に行かなければ聞けない声であり、さるくを体験することで、まさに観光の醍醐味を味わえると感じた。また、外海地区は海に面している一方で切り立った崖の上に位置しており、港が造りにくく、かつ、農業に適さない地区である。重機による道路工事が可能な現代と違い、江戸時代は往来が困難であり、潜伏しやすい一方、産業が発展しにくい地区ということがうかがい知れる。そのような地理的背景も含めた歴史に思いを馳せることができ、現代における観光の強みを見ることができた。